

氷雨の中 新春の京を“初歩き”

さながら寒行のよう

東山山麓に居並ぶ名刹歴訪

二月は洛北・上賀茂を歩く

京都歩け歩け協会（＝KWA、本間昭之助会長、事務局＝京都市南区東九条東山王町九・中外日報社内）は一月二十二日、「新春・古都の道ウオーク」を催した。コースは平安神宮から東山山麓を通って伏見稻荷大社に向かう約十キロ。あいにくの氷雨に見舞われたが、兵庫県南部地震で被災した人たちの一日も早い復興を念じて歩を進めた。

京都歩民デー協賛

京都歩け歩け協会主催

六十六回目を数える今回も京都歩民デー協賛。夜半から降り続く雨で開催が危ぶまれたものの、「愛歩家」らはスタートの平安神宮に集まった。冷雨を衝いて参加したのは約六十人。通常の一割程度の人数だったが、“初歩き”を楽しみにする顔ぶれが揃った。

受付では震災に苦しむ人々に少しでも役立てればと義援金箱が設置された。ウォーカーたちは次々と善意を寄付、京都の空から震災者を励まそうと呼びかけて出発の午前十時を迎えた。

一行は各々、傘やレインコートで“完全防水”。会旗を先頭に出発し、足どり確かに平安建都千二百年の記念式典などに沸いた平安神宮の大鳥居をくぐり抜けた。

三条通を横切って天台五箇室門跡の一つ、青蓮院前の緩やかな登り坂に差しかかる。滑らないよう足元を確かめながら歩を進めると、成人式に出席する着物姿の女子大生たちに出会った。

そして、偉容を誇る知恩院三門前を通って円山公園へ。春には花見で賑わう公園だが、この日は寒さと雨で人影まばら。陽春の訪れをじっと待つ桜並木を通り抜け、八坂神社の境内に入った。

この辺りから坂道と石段は急勾配に。白い息を弾ませてを登り詰めると、水滴で白く輝く霊山観音像が一行を出迎えた。観音像の背後には坂本竜馬をはじめ、維新の志士たちが眠る墓群がある。そこへ向かう参道は「維新の道」と呼ばれ、京都観光の隠れた人気スポット。一行は石畳の続く二年坂から三年坂へ。

沿道にはみやげもの店が立ち並ぶ。しかし、震災の影響からか、観光客の姿はチラホラ。いつもならよけるように歩かねばならないほど混雑するのだが、この日は堂々と石畳の真ん中を闊歩。登り坂を歩き終わると休憩をとる清水寺に到着した。

「清水の舞台」からは雨に煙った京都市内が一望できる。僅かな時間の休憩なのに温まった体が外気にさらされて急激に冷え出した。じっとしていると風邪を引きそう。声を掛け合って早々に再出発。

この後、東大路通から豊臣秀吉を祀る豊国神社、京都国立博物館へ。妙法院、智積院と居並ぶ総本山、名刹に拝礼しながらひたすら南進。体も温まり、頬を紅潮させて歩く参加者が増え出した。

コースは徐々に山手に入る。雨水を滴らせた草木が鮮やか。今熊野観音寺など諸伽藍の薑と深い緑が絶妙のコントラストだ。冬枯れにもめげず、青々とした葉をつける木々に自然の偉大さを感じながら歩を進めた。

ここからは狭い路地が続く。歴史の重みを窺わせる臥雲橋を渡ると禅刹東福寺。さながら寒行の様相の一行だったが、日下門から境内に向かって再び小休憩をとった。雨は相変わらず降りしきり、寒風も出てきた。しかし、「ゴールまでもう少し」という声に励まされて一行は腰を上げる。

隊列を整え、東山から稲荷山へと路地を突き進むと参詣者で賑わう伏見稲荷大社の朱色の鳥居が見え始めた。午後一時、全員が境内社殿奥の広場に到着。完歩印をスタッフに押ししてもらい、コンディションの悪さにもかかわらず歩き遂げた満足感を味わった。

なお、KWAのスタッフをはじめ、参加者から募った義援金は総額一万三千五百円。すべて被災者にと日赤に寄託した。



次の第六十七回例会は二月二十六日。「洛北・上賀茂ウオーク」で、集合場所が京都市北区の北大路橋西詰。鴨川を北上し、上賀茂神社、大田神社、円通寺、針神社、同志社高校グラウンドから宝ヶ池プリンスホテルを経て、宝ヶ池いこいの森までの約十キロを歩く。

平安神宮を元気に出発する [写真は省略]

威容を誇る知恩院三門前を闊歩 [写真は省略]

二年坂、三年坂と石畳を登り詰めてひたすら歩を進める [写真は省略]

京都市内を一望できる清水寺でつかのまの休憩 [写真は省略]

「ゴールまであと少し」と励まされて禅刹東福寺をあとにする [写真は省略]